

令和元年 第17回

東京都教育委員会定例会議事録

日 時：令和元年10月24日（木）午前10時

場 所：教育委員会室

令和元年10月24日

東京都教育委員会第17回定例会

〈議 題〉

1 議 案

第115号議案及び第116号議案

東京都公立学校教員の懲戒処分等について

2 報 告 事 項

- (1) 平成31年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」及び平成31年度「全国学力・学習状況調査」の結果について

教 育 長	藤 田 裕 司
委 員	遠 藤 勝 裕
委 員	山 口 香
委 員	宮 崎 緑
委 員	秋 山 千 枝 子
委 員	北 村 友 人

事務局（説明員）

教育長（再掲）	藤 田 裕 司
次長	西 海 哲 洋
教育監	宇 田 剛
総務部長	安 部 典 子
都立学校教育部長	江 藤 巧
地域教育支援部長	太 田 誠 一
指導部長	増 田 正 弘
人事部長	浅 野 直 樹
福利厚生部長	小 菅 政 治
教育政策担当部長	小 原 昌
企画調整担当部長	谷 理 恵 子
教育改革推進担当部長	藤 井 大 輔
特別支援教育推進担当部長	高 木 敦 子
指導推進担当部長	瀧 沢 佳 宏
人事企画担当部長	黒 田 則 明
担当部長（総務課長事務取扱）	加 倉 井 祐 介
（書 記） 総務部教育政策課長	秋 田 一 樹

開 会 ・ 点 呼 ・ 取 材 ・ 傍 聴

【教育長】 おはようございます。ただいまから、令和元年第17回定例会を開会いたします。

本日は、教育新聞社ほか2社からの取材と、9名の傍聴の申込みがございました。また、教育新聞社から冒頭のカメラ撮影の申込みがございました。これを許可してもよろしいでしょうか。——〈異議なし〉——それでは、許可いたします。入室してください。

日程以外の発言

【教育長】 議事に入ります前に申し上げます。

東京都教育委員会において、一度注意をしてもなお議事を妨害する場合には、東京都教育委員会傍聴人規則に基づきまして退場を命じます。特に誓約書を守ることなく、退場命令を受けた者に対しては、法的措置も含めて、厳正に対処いたします。

なお、議場における言論に対しまして、拍手等により可否を表明することや、教育委員会室に入退室する際に大声で騒ぐ、速やかに入退室しないと行った行為も退場命令の対象となりますので、御留意をいただきたいと思います。

議事録署名人

【教育長】 本日の議事録の署名人は、遠藤委員にお願いいたします。

前々回の議事録

【教育長】 前々回9月19日の第15回定例会の議事録につきましては、先日配布をいたしまして御覧いただいたと存じますので、よろしければ御承認頂きたいと存じま

す。よろしゅうございましょうか。——〈異議なし〉——では、第15回定例会の議事録につきましては御承認を頂きました。

前回10月10日の第16回定例会の議事録が机上に配布されております。次回までに御覧をいただきまして、次回の定例会で御承認を頂きたいと存じます。よろしく願いいたします。

次に、非公開の決定でございます。本日の教育委員会の議題のうち、第115号議案及び第116号議案につきましては、人事等に関する案件でございますので、これを非公開といたしたいと存じますが、よろしゅうございましょうか。——〈異議なし〉——では、ただいまの件につきましては、そのように取り扱わせていただきます。

報 告

(1) 平成31年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」及び平成31年度「全国学力・学習状況調査」の結果について

【教育長】 それでは、報告事項、平成31年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」及び平成31年度「全国学力・学習状況調査」の結果についての説明を、指導部長からお願いいたします。

【指導部長】 平成31年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」及び平成31年度「全国学力・学習状況調査」の結果について、御報告いたします。

まず、平成31年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果についてでございます。本調査は平成15年度から実施している、東京都独自の学力調査になります。

報告資料の上段を御覧ください。

「1 調査の概要」についてでございます。調査日時は令和元年7月4日木曜日です。調査の対象学年は、小学校第5学年と中学校第2学年になります。

調査内容は、教科に関する調査として、小学校は国語、社会、算数、理科の4教科、中学校は国語、社会、数学、理科、英語の5教科について、教科の内容に関する調査です。児童・生徒を対象とした、学習と関わりのある児童・生徒の意識や生活状況に

についての質問紙調査、学校を対象とした指導方法に関する取組や、人的、物的な教育条件の整備条件についての質問紙調査の三つでございます。

各教科の平均正答率等については、右上の表を御覧ください。小学校国語は67.0%、社会は66.3%、算数は60.0%、理科は56.6%となっています。中学校国語は71.9%、社会51.1%、数学は54.5%、理科が49.5%、英語が57.5%となっています。

この表の中で、習得目標値の問題数とその平均正答率も合わせて示してございます。習得目標値の問題とは、どの児童・生徒にも身に付けてほしい基礎的な知識、技能であり、教科書で言えば例題レベルの問題です。そのため、習得目標値の問題の平均正答率は、教科全体の平均正答率よりも、基本的には高くなっています。

下段、結果の概要を御覧ください。

一番左側「(1) 学力の定着が図られている問題例」を示しております。小学校算数、数の相対的な大きさについて理解しているかどうかを見る問題でございます。この問題は、平成25年度にも出題しており、そのときの平均正答率は65.5%でした。この年度は76.0%であり、学力の定着について改善が図られております。その下は小学校理科、温度計の適切な使い方を理解しているかどうかを見る問題でございます。平成23年度に同様の問題を出題しており、平均正答率は43.4%でした。平成29年度に再度出題した際には71.6%と向上しておりました。今年度は74.2%と更に改善が図られていることが分かります。

「(2) 改善が図られつつある問題例」として、中学校英語、伝えたい内容を正確な英文で書くことができるかどうかを見る問題を示しております。この問題と同様の問題を平成30年度に出題しており、その際の平均正答率は36.4%でございました。今年度は57.8%となっており、改善が図られていることが分かります。このように、これまで定着状況に課題があり、経年で変化を見る必要のある問題については、おおむね改善が図られてきていると考えております。

一方で、真ん中ですけれども、「定着が不十分な問題例」として(3)を御覧ください。

小学校国語では、係り受けの関係について問う問題で、「毎日」という言葉が詳しく説明している部分を選ぶ内容ですが、正答率は44.6%でございました。誤答で最も

多かったのは、アの「友達」で29.7%の反応率でございました。

また、中学校国語でも同様の問題を出題しており、正答率は37.1%でございました。「学校で」という言葉が詳しく説明している部分は「始まる」なのですが、誤答で最も多かったのはウの「練習が」で、42.9%の反応率でございました。

小学校算数では、半径や直径、円の中心について理解しているかどうかを見る問題を出題しましたが、正答である「円の半径の長さは直径の長さの2分の1である」と解答できた児童の割合は43.9%でございました。誤答で最も多かったのは、「円の半径の長さは直径の長さの2倍である」と、半径と直径の関係を逆に捉えて解答したもので、31.2%の反応率でございました。これらのことから、文の構成を理解すること、複数の情報を関連付けて理解し表現することに課題が見られることが分かりました。

(4)は、授業内容の理解度についてであり、「授業の内容はどのくらい分かるか」という質問に、「よく分かる」、「どちらかといえば分かる」と肯定的に回答している児童、生徒の割合について、平成19年度から31年度までの推移を教科ごとにグラフに表したものでございます。全ての教科において、小学校で高い状態を維持し、中学校でも増加傾向にあることが分かります。これらのことから、小学校同様、中学校においても授業改善が図られてきていると考えております。

次のページ、(5)を御覧ください。ここでは授業の目標の提示に関する質問の調査結果と、平均正答率との関係を示しております。児童・生徒質問紙調査で、「授業の中で目標が示されていると思うか」について質問したところ、「そう思う」と回答した児童・生徒と、「思わない」と回答した児童・生徒の正答率の差は、小学校では各教科において約20ポイントの差が見られました。また、中学校でも各教科において、約10から15ポイントの差が見られております。このことから、児童・生徒がその授業でどのようなことをできるようにになればよいのかという目標を自覚して学習に取り組むことが、学習の成果と関わっていると考えられます。

一方、学校質問紙調査において、「授業の中で目標を示す活動を計画的に取り入れている」ことについて質問した調査結果を見ると、肯定的な回答が小学校では6.8ポイント、中学校では6.6ポイント、児童・生徒の回答よりも高い傾向が見られました。これは、教員が授業の目標を示しているつもりであっても、児童・生徒がその目標を

十分に自覚できていない状況がある可能性を示していると考えられます。これらのことから、単元や授業の目標を児童・生徒が自覚できるように分かりやすく示す活動を一層充実させていくことが大切だと考えております。

(6) を御覧ください。自尊感情に関する質問の調査結果と平均正答率との関連をまとめたものでございます。

小・中学校共に、「自分のことを大切な存在だと感じている」ことについて、より肯定的な回答をした児童・生徒ほど正答率が高い傾向にあります。これは昨年度も同様の傾向となっております。

(7) は、家の人との会話に関する質問の調査結果と平均正答率との関連をまとめたものでございます。「家の人と、社会の出来事について話をしているか」について、より肯定的な回答をした児童・生徒ほど正答率が高いことが分かります。家の人との会話についてはこれまでも質問してきており、年によって増減はあるものの、肯定的な回答の割合はほぼ同程度で推移してきております。今年度、肯定的な回答をした児童・生徒の割合については、昨年度と比較すると若干減少の傾向が見られます。

「語彙量を増やしていくことが、その後の学習に大きな影響を与えると指摘されている」と、平成28年12月に出示された中央教育審議会の答申でも示されておりますが、児童・生徒の語彙力は家の人など身近な大人との会話の機会が影響するものと考えられます。家庭において、社会的な出来事や学校の出来事について話をすることの重要性について、保護者に向けて引き続き伝えていくことが大切であると考えております。

別紙を御覧いただければと思います。各教科の正答数の分布になっています。資料右側の算数、数学、英語。ここでは下位層から上位層まで分布が幅広くなっております。このことから、今後も習熟度別指導等において、個に応じた指導の充実を図る必要があると考えております。

3 ページを御覧ください。

今年度の「全国学力・学習状況調査」の結果についてまとめたものでございます。左下の5に各教科の平均正答率を掲載しておりますが、全てにおいて全国平均を上回っている状況でございます。なお、中学校英語の調査結果につきましては、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の合計を集計したものとなっております。「話す

こと」に関する問題の結果につきましては、全国の平均正答率と別に集計して、参考値として公表しており、その値は30.8%でございました。

6に、学力の定着が図られている問題例を示しております。中学校の英語の放送問題では、外国人の先生と女子生徒の会話を聞き、話題となっているポスターが音楽祭であることと、10月13日に開催されるものであることを理解することができるかを見ております。東京都の平均正答率は75.7%で、全国平均を約3ポイント上回っております。

中学校数学の問題では、連立方程式を解く問題で、東京都の平均正答率は74.2%と全国平均を約4ポイント上回っております。同様の問題は、平成26年度の全国学力学習状況調査においても出題されておりますが、その際の平均正答率に比べて、東京都も国も3ポイント程度上昇しており、学力の定着が図られていると考えられます。

右側の7に、課題が見られる問題例として、小学校の国語、算数の問題を挙げております。

国語では、高橋さんが書いた調査の内容と結果を読み、高橋さんの考えの理由を明確にして書くことができるかを見る問題でございます。東京都の平均正答率は28.3%と全国平均とほぼ同じですが、無解答率が5%と全国平均と比べてやや高くなっております。このことから、目的や意図に応じて理由や根拠を明確にして書くことに課題があると考えられます。

算数では、「ことねさんの計算の仕方」に書かれている割り算に関して成り立つ性質について理解したことを、「ゆいなさんがまとめたこと」の書き方を参考にしながら言葉を用いて書くことができるかを見る問題になっております。東京都の平均正答率は33.6%と全国平均よりも2ポイント程度高くなっておりますが、無解答率は13.3%となっており、全国平均よりも2ポイント程度高くなっております。これらのことから、目的や意図に応じて文章や数式等から読み取った情報を関連付け、言葉を用いて記述することに課題があることが分かります。

以上のことを踏まえまして、もう一度2ページの下段、取組の方向性を御覧ください。

今回の学力調査の結果を受けまして、3点の取組を進めてまいります。

第1は、知識及び技能の確実な定着や思考力、判断力、表現力等の一層の伸長を図るため、児童・生徒が授業の目標を自覚して取り組むことができる学習活動を促進する等、新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善の更なる充実を図ってまいります。

第2は、自尊感情に関する質問の調査結果と平均正答率との関連から、小学校から中学校にかけて正答率の差が広がる傾向が見られることから、グループ活動等において互いの考え方の良い点等を認め合う学習活動を促進し、主体的に学習に取り組む態度を育成してまいります。

第3は、家庭の教育力を活用することも大切であることから、家庭での会話の重要性や、家庭での学習、生活についてまとめた保護者向けリーフレットによる情報発信により、学校と家庭、地域との連携の充実を図ってまいります。

説明は以上でございます。

【教育長】 ただいまの説明に対しまして、御質問・御意見等ございましたらよろしくお願いたします。

【北村委員】 基本的には、学力が定着している傾向が見られるということは好ましいことかと思うのですが、やはり目標未達の子供たちの割合というのは一定数おられますので、その子供たちの更なる学力の向上ということで、最後に御説明いただいたような、今後の方向性というものがあるのだと思いますけれども、2点コメントさせていただきます。

1点目は、こういった調査の結果をどのように学校にフィードバックしていくのかということ考えたときに、先生方にこの調査結果をどのように理解、解釈していただいて、それを日々の教育活動に生かしていただくのかということだと思いますが、先ほど、例えば家庭での会話、確かにこれは語彙力を高める上でも大事だと思いますけれども、同時に新しい学習指導要領で強調されているような、探究的な学びなど、そういったものを進めていく中で、普段から家庭で社会問題について話したり、そういうことをしている子供たちと、そういう機会がなかなか学校外ではない子供たちとは、恐らくこれから徐々に、徐々に、差が更に開いていくおそれがあるのではないかと個人的にも懸念しております。単にこれは語彙力の問題ではなくて、やはり今後、主体的・対話的で深い学びをしていく中で、学びの機会というものが、家庭の中での

時間も含めてどういうふうに充実させていくのかということが非常に大事になってくるのではないかと思いますので、やはり先生方にもそういったことを考えていただきたい。そのために、もちろんここに保護者向けリーフレットというものも検討されているわけですが、問題はそういった家庭の保護者が、どれだけこういったリーフレットをきちんと読んでくださるのかということもあるかと思いますので、もちろん学校でできること、先生でできることは限られている面がありますが、今までとまた違う、何かそういった、学力の定着に困難を抱えている子供たちへ、より配慮した指導の在り方というものを、更に検討していただけたら良いなということコメント、一つ目させていただきます。

それから二つ目ですけれども、先日、国立情報学研究所の新井先生が、読解力ということで、総合教育会議のときにもお話しされましたけれども、先ほどの小学校算数の円についての説明など見ていると、これは直径、半径を理解していないというより、もしかするとそういった文章そのものが読めないで、そういう解答になってしまったのではないかなということもかなり想像がつかます。せつかく、今後、都としても読解力というものをどういうふうに向上させるか考えて、今いろいろ検討している最中だと思いますので、やはり算数を単なる算数の問題として捉えないで、その基礎になるような読解力の向上も含めて、またこれを、更にどのように学校で先生方に教育活動の中で生かしていただくのか。そこにつなげていくことを是非更に検討していただきたいなということをお願いしたいと思います。

【指導部長】 結果については、結果についての報告会というものをやりまして、どういう問題に課題があって、それはどういうところに起因するのだろうか、それを解消するためには、どういう指導が有効だろうかということを提示して、先生方と一緒に考えていく報告会を行っています。

それから、これは大都市圏に見られる状況ですけれども、子供の家庭の状況が非常に多様になっているので、一律的に物事をやっていっても、なかなか入っていかないという状況があるかと思います。ですので、やはり個別に、個に応じた指導を見童・生徒に行っていくのと同様に、その家庭に対するアプローチの仕方をやはり細かく考えていく必要があるかと思っています。

それから、2番目の読解力の問題については、まさしく御指摘のとおりかと思っています。今、都教育委員会では、直接的には高校において実証実験等をしてはいますが、学びの基盤プロジェクトということで、読解力等に焦点を当てた指導方法等の開発をやっておりますので、もちろん高校をモデルにはしていますが、高校に至るまでの過程が恐らく課題になっているだろうということになりますので、その指導方法については中学校、小学校に還元していきたいと考えております。

【教育長】 ほかにいかがでしょうか。

【宮崎委員】 大変貴重な調査データで、毎年蓄積されますから、この経年変化ということも大事だと思うのですが、これは毎回申し上げることですけれども、データをどう読むかということで、意味がいろいろと、見え方が違ってくると思います。

グラフで、授業内容の理解度というものがありますけれども、確かに小学校も中学校も年を追うごとに理解度が上がっているというグラフではありますが、全体傾向で見ると、小学生のときは理解している子供が、それでも比較的多いのですが、中学生になると全部下に行ってしまうのですよね。理解度が少し至っていないというグラフになっていると。小学校と中学校とのかい離をどう埋めていくかというのも一つの課題ではないかなというふうに、このグラフから非常に感じているところです。

それから、読解力の問題は先ほどの解説の中で、平均よりも正答率が高いけれども、無解答率も高いという解説がありました。二極化しているのかなと思ってみると、最後の得点の分布図を見ると、取りあえず正規分布の、サインカーブがゆがんでいる科目もありますけれども、二極化しているグラフにはなっていませんね。ということは、ある程度の基準を満たしていない子供の平均、それから満たしている子供の平均がかい離しているということで、そういう結果になるのだろうというふうに思います。あまり平均値が意味を持たないのではないのでしょうか。先ほどの御説明の中でも、非常に多様化している、家庭も多様化している、子供も多様化、才能も多様化していますし、AIが入ってくれば求められる資質も多様化します。そうすると、平均で全国とどちらが勝っているとか、全体を見るとどうだということは、あまり今後は意味を持たなくなるのではないかと、もっと違う形の分析が必要なのではないかという気が非常にしております。ですので、このデータをどう生かしていくかということは、これか

ら、令和にもなったことですし、新しいアプローチみたいなことも考えていただけると良いかなというふうに思っています。

【指導部長】 データの解析については、またこれから勉強していきたいと考えております。ただ、先ほどの、無解答率の課題ですけれども、大体、全国の学力状況調査で上位に入っている県は、無解答率が低いです。それは指導の在り方というのが一つあるのと、大都市圏の課題として、論述問題に向かえない、日本語の指導が必要な児童・生徒の割合がやはり大都市圏は高いという状況があるかと思えます。ただ単に平均値等々ではなく、そういう状況についてどのようにアプローチしていくかということが重要なのかなと考えております。

【宮崎委員】 あとは、小学生で分かっていたのに、中学生で分からなくなったという課題もあります。

【指導部長】 これは、中学校の内容が抽象的になっていくという、それは学年を上がるにつれて、実生活からどうしても離れがちな状況になっていきます。ですので、新しい、今の学習指導要領でもそうですけれども、例えば数学にしても身近な素材で数学的な考え方を培っていくとか、やはりそういうところに力を入れていかなければ、小学校と中学校のこの差はなかなか埋まらないかなと考えております。

【教育長】 ほかにいかがでしょうか。

【秋山委員】 詳細なデータをありがとうございます。今、子供たちの社会性が全体的に低下している原因の一つが、見本になる大人が少なくなっているというところがあります。ですから、家庭の中で子供たちと社会の問題を話すとか、それ以前に親同士が1日の出来事を話し合うとか、お手本を見せていく必要があると思うので、家庭へのリーフレットの中に紹介していただきたいと思えます。

それからもう一つは、これからICTの授業が活用されていくのですけれども、ICTを活用して授業しやすいものと、活用がしにくいものがあるのではないかと。また今活用しているものとしていないものがあるのではないかと。それによって学力に関係しているかというのは今後の課題だと思いますので、視点に入れていただければと思います。

【指導部長】 ICTの活用は、これから先どんどん進んでいくかと思えますけれ

ども、ICTだけ活用すれば学力が向上していくという状況には絶対ならないのだと思います。やはり、今までの学校で積み重ねてきた実践とICTを、いかにベストマッチングさせていくかということが大切なポイントだというふうに考えております。

【遠藤委員】 最後に、今後の方向性ということで、家庭に対してどう指導していくのかということが大きなポイント、そのとおりだと思うのですが、この調査の目的である東京の公立学校の子供たちの学力が、小学校でどうか、中学校でどう推移、向上していったかを把握することが重要である。ただ、社会全体ということ考えた場合に、公立学校の子供たちだけの学力が問題ではないわけであって、公立・私立学校共に同じ年代の子供たちの学力がどうかと考えると、資料の1ページ目に、対象人員の記載がありますよね。小学校と、それから中学校で対象の人員が2万人ぐらいの差がありますよね。そうすると、この2万人の差というのは何かということ、私立の中学校に行っているということ、公立の小学校の卒業生のうち2万人ぐらいが公立の中学校に行っていないということです。しかし、東京都の子供たちの学力ということ考えた場合には、9万人の小学校全体が中学校に行ったときにどのぐらいの学力になるかということだと思います。東京都の教育委員会としては、公立の中学校の学力というものに焦点を当てるというのも当然のことで、こういう調査は続けてやっていただきたいと思いますが、これは私立学校との御協力の問題だと思いますけれども、同じ問題を私立の学校、公立の小学校から抜けた2万人の中学校、国立とか私立の中学校に進学した子供たちに同じ問題をやってもらったら、どういう結果になるのかなというのも一つ関心があります。社会全体として、同じ年代の子供たちの学力水準ということを見るということも一つ、これはあくまで参考でございます。そうすると、そういうものの結果の中から、今度、公立の中学校としてどういうインプリケーションが出てくるのか。国立の中学校あるいは私立の中学校での教え方、教育の方法、あるいは家庭環境もだいぶ違うと思いますけれども、そういう中でもって、公立の中学校として何ができるのかということのインプリケーションが得られるのかなということも、ちょっとこのデータを見ていて感じました。これは全く、私の個人的な思いです。

【義務教育指導課長】 私立・国立の学校の生徒の学力について、今、問題提起を

していただきましたけれども、「全国学力・学習状況調査」については、私立・国立の学校も参加することができます。そちらの方も調査結果等というものがありますので、一応御報告させていただきます。

【遠藤委員】 同じ東京都の、この学力調査と同じレベルでは実施してやっていませんよね。

【義務教育指導課長】 東京都の学力調査では実施していません。全国の学力調査は私立・国立の学校も元々実施しております。

【山口委員】 1点だけ。お願いというか、たぶんここに出てこないだけであるのかもしれないのですけれども、やはり数字というのはあくまでも数字で、それを誰がどう読み解くか、この数字の変化や、あるいはこの状況に、現場で教えていらっしゃる先生方が、実感として、先ほど議論になった家庭の状況ですとか、多様化とか、いろいろなことをどのように感じているのかというのを、やはり先ほど平均値ではないということが正に当てはまると思います。東京も非常に広い、そして地域によっても非常に違いがあると思いますので、そういったところも先生方の実感などもこの調査結果と合わせてサポートと言いますか対策等に結び付けていただけると良いかなと思います。どうしても一律全部こういう対策というふうになってしまうのですけれども、恐らく置かれている状況も様々で、先生方が持っていていらっしゃる知恵もたくさんあると思いますので、都教育委員会としてもそういった声を是非、より拾い上げていただいて、やっていただけると良いかなというふうに思います。

【指導部長】 東京都の学力調査の場合は、自校採点を各校にお願いをしている状況なので、そこで先生方は日常の指導とこの結果とのギャップみたいなところは感じられると思います。

例えば、最初のページの社会のところ、全体の平均正答率よりも習得目標値の問題の正答率が低くなっていますけれども、これは2問同じような問題なのですけれども、いわゆるごみの処理の流れ図、あるいは110番通報のその後の流れ図が示してあって、それに対して次の文章は正しいかどうかということ判断する問題です。この二つの問題の正答率が4割ぐらいなのです。それを習得目標値の問題として出すということは、これは基礎・基本だというふうに考えているのですけれども、教科書だ

と色が付いているので、色で判断できるのですけれども、いわゆるテキストベースになっていくと、実は理解が十分ではないというような実態が明らかになりました。そういったところも先生方は、本当におっしゃられるように実感として分かっていたいただければと思います。

【北村委員】 どうやってこのデータを解釈するのかというお話がありましたけれども、やはりいろいろな角度からの検討が必要だなと思います。自尊感情についても、確かに自尊感情と平均正答率との間に何らかの関連はあるのかもしれませんが、それ以上に大きな問題は、恐らくこれは東京都だけではなく、日本の多くの子供がそうですけれども、テストの点数が良いにもかかわらず自尊感情が低い。国際的に見たときにも明らかに日本の子供たち、学力的には世界的に高いレベルにありながら、自尊感情が一番低いレベルにあるという課題がありますので、これは多分、これしか差がないというのは、逆に言えば勉強できようができませんが自尊感情が低いという大きな課題があると思います。そのあたりのこととかも、これだけを見てしまうと何となく見えないものもあるかと思しますので、そこにまた先生方の実感も合わせながら、いろいろな角度からこういったデータを解釈しながら、現場と対話しながら生かしていただきたいなということを強く思います。

【指導部長】 自尊感情のところの課題は、いわゆる世間でも言われているところですので、その辺はしっかり追っていきたいと思っているのですけれども、ここで出しているのは、あくまでも相関があるという結果の表示で、ここに因果関係があるとは必ずしも我々も断定はしていません。正答率が高くても自分のことを大切に思っているかどうかという回答については、否定的な回答を示す児童・生徒はいますので、そこは学校で個別に対応を考えていくということになろうと思います。

【教育長】 ほかにいかがでしょうか。よろしゅうございますか。

それでは、本件については報告として承りました。貴重な御意見ありがとうございました。

参 考 日 程

(1) 教育委員会定例会の開催

11月14日（木）午前10時

教育委員会室

【教育長】 次に、今後の日程につきまして、教育政策課長からお願いいたします。

【教育政策課長】 次回の定例会でございますけれども、11月の第2木曜日となります、11月14日木曜日午前10時から、ここ教育委員会室にて開催を予定しております。以上でございます。

【教育長】 ただいま説明がありましたとおり、次回の教育委員会につきましては11月14日に開催したいと存じますけれども、よろしゅうございましょうか。

それでは、日程そのほか、何かございませんでしょうか。

それでは、これから非公開の審議に入ります。

(午前10時43分)